

創価学会出現以前の宗門の「秘史」(二)

法主が失踪し、僧俗会議で法主を選出

●「僧俗会議」で法主を選出

『日霽上人伝』には、日霽法主と日盛法主の確執が書かれているだけでなく、法主の選出についても、記述がある。

まず、『日霽上人伝』には

「其の年十二月大衆檀徒等、学頭広道院を大坊へ請待す五十三世日霽上人是なり」とある。

これは、学頭であった日盛法主が僧侶と檀徒により、大坊に入ること、すなわち法主になることを請われたということである。法主の選出に信徒が関与していたことがわかる。

また、同伝には、日盛法主が失踪して、日英法主が再度登座した時のことを、

「盛師の還任歎然なくば英師の御再住あらん事を只管に懇望す是に於いて衆檀会議の上、英師御再住の事に決し予を迎ふ」と説明している。

これは「日霽法主が、日盛法主が狎座に戻るか、もしくは日英法主が再び登座するように強く望んだが、衆檀会議で日英法主が再び登座することに決まった」ということである。「衆檀会議」すなわち、僧俗会議で次期法主が決められたことが明記されている。

昔の貧しかった宗門では、檀家が大きな力を持ち、人事も含めて、様々な形で宗門に影響を与えていた。

●日霽法主と日盛法主の確執を認めていた日頭

宗門は「日霽法主と日盛法主の確執はなかった」と言い張っているが、二人の法主の確執を認めていたのが、他ならぬ日頭である。

日頭はある僧侶に、

「日霽上人は日盛上人を歴代から除けと怒っていた」と語っていたという。

法主が人間である限り、行き違いや確執があっても、当然のことであろう。それを「法

主は絶対である」と言い張るほうが不自然である。

●貫首が己義を構えたという場合には、用いてはならないと指南した日頭

「遺誠置文」の「衆義たりと雖も仏法に相違有らば貫首之を推くべき事」の文について、日頭は平成四年八月の全国教師講習会で次のように述べている。

「貫首が己義を構えたという場合には、皆のほうが用いてはならない。これも私はそういう在り方が、あるいはあるかと思えます」「南無阿弥陀仏と私が唱えだしたら放逐するだろうね。絶対に放逐しなきゃいかんよ！」

法主が間違いを犯せば、放逐することはあり得ると、日頭自身が指南しているのだ。

間違った法主を用いないということとは「従わない」ということであり、宗門から放逐するということは、「退座」であり、最終的には、歴代系譜

から「除歴」ということになる。

日頭の盟友であり、指南役とも言われていた故・河辺慈篤は、学会が破門された後、日頭について

「あれ(日頭)は除歴しなきゃならん。六十七世はいないんだ」と発言している。日頭の裏の顔を知る河辺の発言は重い。

史実を見れば、僧俗の会議で法主を選んだ場合もあるし、選挙で法主を選出した時期もある。

すなわち、法主はあくまでも宗派の代表者であり、特別な存在ではない。だから、法主が問題を起す場合もあるし、近代史を見れば、問題を起こした人間が法主になる場合もある。

また、法主の地位をめぐって派閥争いが激化したこともある。そのことを示す史実は多い。追って紹介していくことにする。(続く)